

空だきあり、陰陽寮ときをそす、ことちに三の様有つねは盤渉調、半呂半律あさのしらべなり、しる人すくなし。

〔體源抄十五〕乞巧奠に箏をしらべてつくゑにおく事、机二脚なり、東西にこれを次で又一脚も侍也、二脚あらば東のつくゑは雙調にしらぶべし、西は平調にしらべて、箏は一張なるべし、但一ちやうだてつくゑも一きやくあらば平調のことちにしらべておくべきなり。

〔後水尾院當時年中行事上七月〕

七日

梶の葉に歌をかゝしめ給ひて、二星に手向らる御引なほしめ

して、御三間の御座に著御、御はいせんの人、例のきぬをいたきて御前に参る、かけ帶ばかりをかけて候す、内侍ひとへ衣をきて、御すゞりをもて参る、其やう重硯の中のすゞり七ツをとり出し、ひろふたにすう、二とほりに並ぶ、上に三ツ下に四ツ也、いもの葉に水をつゝみゆひて、ひろふたの上の方の御右の方角によせて、あたらしき筆を二管、墨一挺、硯の傍におく、梶の葉七枚を重ね、おなじ枝の皮七すぢ、そうめん七すぢ、索べいニツを三方にすゑて御前におく、七ツの硯にいもの葉の中なる水をそゝがせたまひて墨すり、梶の葉一枚ヅ、とりて、歌をかゝせ給ふ、或は當座御製、或は古歌定やうなし、硯七面をかへて一首づ、かき終せ給ふ、古歌ならば、同じ一首を七枚に書なはいせんの人梶葉七枚を重ねて、索べいニツを中に入ておし巻、上下を折てかぢの木の皮七すぢ、素餅○麩誤七すぢをもて、十文字におし結びて出すなり、女官便宜の所やねに打あぐ、中なるものに心をかけて、からすなどのかけてゆくこと、毎度の事也、御硯は院女院親王女御等御座の時、次第にまるらせらる御ものし右京大夫などもて参る略中こよひ星の和歌兼題にて各詠進す、講せらる、迄はなし、たゞとり重ねて置る、ばかり也、毎年一首懐紙也、若七首のくわいしあり、同御遊あり、勿論御所作堂上地下のがく人しこう、盤渉調七なり、但御遊は有無不定也、〔洞中年中行事七月〕七夕從禁中御硯まいらせらる、右京大夫持參なり、内侍請取獻之、則かぢの